

---

## 最近読んだ本

原 田 昌 和

---

久しぶりにエッセイの執筆依頼を受けた。日頃は民法の授業を通してしか学生とは接しておらず、どのような人なのだろうかと思っている学生もいると思うので、あえて法律の話題は避けて、最近読んだ本を2冊紹介して、それに代えたい。

### 1 Sir Arthur Conan Doyle, The Best of Sherlock Holmes, Macmillan Collector's Library, 2009

私は小学生のころからシャーロック・ホームズのファンで、当時からは、小学生向けにアレンジされたものをよく読んでいた。中学生ころには、NHKで、英国グラナダテレビ制作、ジェレミー・ブレッド主演（露口茂吹替）の『シャーロック・ホームズの冒険』の放送が開始し、それを観ながら、いつか英語で原作を読みたいと思っていた。

本書は、コロナ禍の少し前にロンドンに旅行に行った際に、シャーロック・ホームズ博物館で購入したものである。しばらく、本棚に置いたままになっていたのだが、最近になって、モーリーン・ウィテカー（高尾菜つこ訳、日暮雅通監修）『シャーロック・ホームズとジェレミー・ブレッド』（2023年、原書房）が出版され、また、Huluで、グラナダテ

レビ版のドラマの配信が始まったのをきっかけに、手に取るようになった。

本書収録の1作目は、「A Scandal in Bohemia (ボヘミアの醜聞)」である。この作品は、シャーロック・ホームズの56ある短編小説のうち最初に発表された作品で、シリーズ全体の中でも、「緋色の研究」「4つの署名」に続く3作目ということである。本作品は、ホームズと女性といういささか不似合いな、謎めいた一節から始まる。

To Sherlock Holmes she is always *the* woman. I have seldom heard him mention her under any other name. In his eyes she eclipses and predominates the whole of her sex. It was not that he felt any emotion akin to love for Irene Adler. All emotions, and that one particularly, were abhorrent to his cold, precise but admirably balanced mind.

このあと、ワトソンの近況をホームズが言い当てるという（お決まりの）一幕を挟んだのち、大柄な紳士（実はボヘミア国王）がホームズのもとを訪ね、若いころに女性（アイリーン・アドラー）と撮った写真を取り返すことを依頼するという形で、物語は進む。機転を働かせて写真のありかを突き止め、取返すまであと一步というところで、ホームズがアイリーンに出し抜かれるところが本作品のハイライトである。本書には、『ストランド・マガジン』に掲載された際のシドニー・パジェットの挿絵も掲載されており、原作の雰囲気を楽しむことができる。

さて、本書収録の最後の作品は、「The Devil's Foot (悪魔の足)」である。「悪魔の足」とはアフリカ原産の、燃やすと幻覚作用を有する致死性の有毒ガスを発生させる植物の根なのだが、この植物を利用して恋

人を殺された探検家が、同じようにこの植物を利用して復讐するというストーリーである。本書の最終盤に、次のようなホームズのセリフがある。

I have never loved, Watson, but if I did and if the woman I loved had met such an end, I might act even as our lawless lion-hunter has done.

この作品は、ドイルが書いた最後の短編小説ではない。したがって、これはドイルの意図ではないのだが、本書の編者が、「ボヘミアの醜聞」の冒頭とちょうど韻を踏むように、ホームズのこのセリフで締めているのは、なかなか粋な締め方のように感じられる。

本稿脱稿後、篠田航一『コナン・ドイル伝——ホームズよりも事件を呼ぶ男』（講談社現代新書、2025年）に接した。非常に読みやすい本なので、ドイルはもちろん、ヴィクトリア朝から第一次大戦ころまでのイギリスに興味がある向きには、一読を勧める。

## 2 新関公子『森鷗外と原田直次郎』（東京芸術大学出版会、2008年）

森鷗外は、1884年から1888年までドイツに留学している。1887年から帰国までベルリンに滞在しており、当時の居室が今も森鷗外記念館として公開されている。在外研究中に訪問したことがあるが、こぢんまりとした居室であった。鷗外はベルリンに移る前にミュンヘンに1年ほど滞在しているが、そこで知り合ったのが、同じく留学中の画学生原田直次郎（1863-1899）であった。『うたかたの記』の主人公巨勢のモデルとされているほか、早逝した直次郎のために「原田直次郎没後十周年記念遺作展覧会」を開催するなど、鷗外と直次郎は非常に親しく交流している。

た。

鷗外の代表作として広く知られているものの1つに『舞姫』がある。今でも高校の国語教科書に載っているらしいが、主人公太田豊太郎の経歴が鷗外に似ていることや、鷗外のドイツからの帰国後にドイツ人女性が鷗外を追って来日したなどの事件もあって、鷗外自身がモデルであると一般には言われている。

これに対して、本書は、主人公太田のモデルは原田直次郎ではないかという興味深い主張を行っている（第1章 初期三部作『うたかたの記』『舞姫』『文づかひ』に見る友情と協力「2 『舞姫』の成立まで」）。『舞姫』において、ドイツ滞在中給費を絶たれた太田は、友人相澤謙吉のあっせんで日本の大臣のロシア訪問に通訳として同行し、復官と帰国のチャンスを与えられるが、直次郎も、ヨーロッパの美術行政の調査に来た日本の役人のドイツ国内の視察を案内したという、太田によく似た状況設定にあった。かつ直次郎は、日本に妻子がいたにもかかわらず、ドイツ人女性と同棲し、妊娠させてしまうという、これも太田と同様の状況にあった。

この日本の役人による視察は、わが国における東京美術学校（現在の東京芸術大学）の開設に向けたものであったが、著者は、状況証拠から、直次郎の絵画の才能を高く評価し、ドイツ人女性との同棲生活の長期化に危惧を抱いていた鷗外が、直次郎の転機を図って、役人の欧州視察の随行員に彼を推薦し、新たに開設される美術学校の教授職での採用につなげようとするとともに、ドイツ人女性との関係を金銭で解決する役を引き受けたのではないかと推測する。

まもなく直次郎は帰国するのだが、東京美術学校の教授職への就任はかなわなかった。当時のわが国の美術状況は、洋画排斥・国粋主義を強硬に主張するフェノロサと岡倉天心の独壇場で、新たに開設された東京

美術学校には西洋画科は設けられなかったのである（時期的に民法の法典論争が想起される。なお日本美術の擁護者として知られるフェノロサだが、自身はアメリカ人であり、ヨーロッパ美術が広く紹介されると自分の地位が脅かされるという危惧もあったらしい）。しかもこの後、わが国の洋画界は冬の時代を迎えることになる。

著者は、『舞姫』について、自分が尽力して帰国させたにもかかわらず、このような結果になってしまったことに対する「何か済まないような、借りのあるような気持」を伴う「痛恨の青春の記憶」が、この作品に塗りこめられているのではないかと評している。

さて、1887年の帰国から、直次郎は、洋画排斥運動と戦うことになる（第二章 二人の表現の特質をめぐって「1 原田直次郎の帰国とその後」の活動）。直次郎は、あえてフェノロサと岡倉天心の支持母体である国粋主義的な絵画団体に（どのようなつてがあったのか）入会し、フェノロサを批判する講演をしたり、日本画の振興を趣旨とする日本美術展覧会に西洋画を出品するなどした。さらに、民営の絵画団体に参加して、機関誌を通じて洋画の啓もう活動を行い、その後も、東京美術学校に西洋画科を開設するように運動した。実作の面でも、西欧的遠近法を取り入れた日本画を描かせようとしていたフェノロサに対抗して、《騎龍観音》（1890年）や《素尊斬蛇》（1895年）を内国勸業博覧会に出品し、油彩画の方がはるかに、遠近法的空間の深奥感や人物の実在感を描けることを示そうとした。こうした直次郎の奮闘もあって、1896年に東京美術学校に西洋画科が開設されるが、そのときには直次郎はすでに病床にあり（正岡子規と同様の脊椎カリエスと推測されている）、加えて、フランス印象派の影響を強く受けた黒田清輝ら直次郎の次の世代が評価されるようになっていたこともあって、教壇に立つことなく、1899年に36歳という若さでこの世を去った。なお、日本における西洋画の受

容が主に印象派から始まったことについては、日本の西洋画をかなり特殊なものにしたとの評価もしばしば聞かれる。

改めて直次郎の作品を観ると、《騎龍観音》や《素尊斬蛇》は、上記のような意図から無理をしたせい、あるいは病気のせい、今日の目からは、いささかマンガチックにも見える。むしろドイツ滞在時に描かれた《靴屋の親爺》(1886年)や各種風景画の方が、人物の表情にしても、構図や色調にしても高い画力を感じる。ドイツ時代の師ガブリエル・マックスと比べても全く遜色はない。鴎外の勧めに応じず、ドイツで活躍を続けていたら、また別の人生もあったのではないかと思わざるをえない。森鴎外との関りから、時代に翻弄された一西洋画科の一生を描き出す好著である。